エスター B. ローズと日本
――戦前、戦中、戦後の活動を通して――

郷　戸　夏　子

1.　はじめに

本稿は、2016 年 11 月 28 日に開催された国際シンポジウム「日本の大学とキリスト教―戦前・戦後の教育改革と宣教師団体」において発表した原稿を基としている。本発表において私は、フレンド派の宣教師エスター B. ローズの活動と日本との関わりを戦前、戦中、戦後の活動を通して検討した。

今回取り扱った、エスター B. ローズ (Esther B. Rhoads 1896–1979) はアメリカ合衆国フィラデルフィア出身のフレンド派 (The Religious Society of Friends = Quaker) の女性である。1917 年に宣教師として初めて来日し、東京の普連土女学校（現在は、普連土学園）で英語や家庭科を教え、1940 年に一時帰国するまでの間、日米間を行き来し活動していた。1940 年以降は日米関係の悪化により日本への帰国が困難となり、1946 年までアメリカでの滞在となった。その間には、アメリカ・フレンズ奉仕団 (the America Friends Service Committee = AFSC) のメンバーとして、カリフォルニア州パサダナ地方の収容キャンプで日系アメリカ人の支援活動に参加した。1946 年以降、LARA (Licensed Agencies for Relief in Asia) の駐日代表の一人として 1952 年まで救済物資の配分計画、実施、施設訪問などを行い、日本各地を訪れた。また他にもローズは 1947 年には普連土学園の財務理事及び教師、1949 年からは学園長に就任している。1947 年から日本を去る 1960 年までに、津田塾大学での教師 (1947–1951)、社会事業施設興望館の理事 (1950–1953)、津田塾大学 (1952–1960) そして国際基督教大学 (1953–1960) の理事に就任し、エリザベス・ヴァイニング (Elizabeth Janet Gray Vining 1902–1999) の後任として 1950 年から 1957 年まで皇太子明仁親王及び天皇家の英語教師を務めることとなる[1)]。

これらを見ると戦後ローズが LARA を代表とするさまざまな社会福祉活動や教育分野に携わっていたことがわかる。それだけではなく、彼女は学校や大学また家庭教師として戦後日本の教育の場にも携わっていた。そして、戦後新たに設立された国際基督教大学の評議員や理事にも名前を連ねている。

これらは、戦前からのローズの活動や日本人とのネットワークがあったからこそだと考えられる。戦前には、普連土学園の教師、フレンド派の宣教師として活動したことからも日本

のキリスト友会の人々とのつながりは作られていたと考えられる。戦時中のローズのアメリカ・フレンズ奉仕団としての活動は、日系アメリカ人への救済、援助活動があり、その活動の一つに大学適齢期の日系アメリカ人、主に二世への東部の大学への入学支援活動があった。ローズはその活動に参加していたと言われている。日本生活の経験から日本語も話せ、日本人への理解があるローズの存在は、日系アメリカ人にとってどのような存在だったのだろうか。

以上を踏まえ、本稿ではエスター B. ローズと日本との関わりをクロノロジカルに戦前、戦中、戦後の活動を通して明らかにし、またどのようなネットワークが戦前から戦後に至るまで継続されていたのかを検討する。

今回使用した史料はアメリカの Haverford College の図書館で史料調査を行なった際に手に入れた書簡や史料とキリスト友会の機関誌『愛の友』『友』の記事を使用している。

本研究で欠かすことのできない先行知識として、フレンド派（クエーカー）の存在が挙げられる[2)]。フレンド派とはプロテスタントの一派であり、1650 年代にイギリスでジョージ・フォックス (George Fox 1624–1691) によって創設された。フレンド派は別名クエーカー (Quaker) と呼ばれることも多いが、どちらも間違いではなく、クエーカーは外部から呼ばれる名称であり、自らを称する時はフレンドと呼ぶ。すべての人は、「内なる光」があり、「神の種子」を持っていると信じているため、非暴力と平和主義の立場を主張している。日本ではフレンド派の名称である The Religious Society of Friends を訳したキリスト友会が団体名とされている。日本への宣教は 1885 年にフィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会 (The Women's Foreign Missionary Union of Friends in America) によって行われた[3)]。女子教育の必要性を説いた新渡戸稲造の影響もあり、婦人外国伝道協会の重要な使命として女子学校の設立が位置づけられた[4)]。1887 年に普連土女学校が創設され、ローズはフィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会の一人として 1917 年に来日した。

2. 戦前の活動とネットワーク (1917–1940)

戦前のローズは、宣教師として来日し、普連土女学校の教師として滞在することとなる。日本滞在中には、関東大震災が発生するが、ローズは日本フレンズ奉仕団のメンバーとして救済活動に参加する。このように戦前のローズは、教師と宣教師またキリスト友会のメンバーとして人々と関わっていた。

2.1. ローズと日本との関わり

ローズは 1917 年の秋から宣教師として来日し、普連土学園で教師として働いた。ローズが日本への関心を示した理由としては、2 つあげられている[5)]。1 つ目に幼少からの家庭環境、2 つ目に 1917 年の米国の社会的環境である。ローズの祖父が 1892 年に来日したことや、フィラデルフィア出身のローズの両親が新渡戸稲造の夫人であるメアリーの友人であったこ

とで、ローズは幼少の頃から新渡戸稲造の話を聞く機会があった。それらの影響もありローズは来日以前から、日本の接点があり、日本への関心を持っていたと考えられる。2 点目の米国の社会的環境としては、1917 年という第一次世界大戦の中での米国の参戦とフレンド派の立場が挙げられる。参戦に対し一般市民の間での盛り上がりを見せる中、非戦平和を唱えるフレンド派の人々にとっては困難な社会的環境であったと指摘されている。その様な状況でフレンド派の人々は、戦争以外の道とその必要性を訴えた。また戦争の被害をうけた欧州の救済と復興活動の組織としてアメリカ・フレンズ奉仕団が創設された。

ローズが日本を去る際に普連土学園の新聞に寄せた言葉（「日本の生活四十三年間」『普連土学園新聞』（第 44 号、昭和 35 年 2 月 8 日））によると、ローズは 1917 年の夏に参加した、ヤング・フレンズの会議において、普連土学園の教師が不足していることを知った[6]。ヨーロッパで大戦が行われている中、フレンド派の人々が救済や平和の仕事について考えている中で、いったい自分に何ができるのかを考え、そのなかでの選択肢の一つが日本に宣教師として訪問することだったと言われている。しかし、日本に行くことは彼女が自問自答する中でいつも「ノー」という傾向にあった。そのような時に、ある日彼女が大木の下に座り込み考えていた時あることが起こったと書かれている。

> 「その時一匹の老いた亀が芝生の中から出て行きました。私は何となくすばやくて、華やかで、できる限り無責任な野うさぎになりたいと思っているのかもしれないと気づいたのです。信仰を持って正しく動いている亀になろうと決心しました。つまり私の仕事があまり成果を示さないにしても、私が日本へ行くことは神の御意志だと考えたのです。」[7]

信仰をもって正しく生きていれば、いつか目標にたどり着くことができるだろうというローズ真摯な態度がこの言葉に現れている。またそのように考えていた彼女だからこそ、その後の多岐にわたる仕事において、冷静に、考えて行動を起こすことができたのではないかと考えられる。

このような背景をもとにローズは 1917 年に日本に来日することとなった。

2.2. 普連土学園、宣教師としての活動

1918 年ペンシルバニア大学に 1 年間の聴講生として進学し、1919 年からアーラム大学に入学し、1921 年に卒業してまた東京に戻り普連土学園に復職した。その後は 2 年ごとに 6 ヶ月の休暇を得て日本とアメリカを行き来することとなった。日本での生活は主に、普連土学園での活動と宣教師としの活動が中心となっていた。普連土学園では家庭科と英語の授業を担当した。着物に袴の時代に、洋裁のミシンの使い方や日本料理、西洋料理の作り方、洋菓子、フランス刺繍など教えており、当時の学生に言わせると「大変ハイカラな学生生活」[8]

と感じるような学校生活、授業をおこなっていたようである。

戦前にキリスト友会が発行した機関紙『愛の友』や『友』においてもローズの記事を目にすることができる。ここでローズは、第一次世界大戦におけるアメリカのフレンド派の活動の紹介、ローズ自身の活動、1918 年に大阪で行なわれた基督教婦人矯風会の会議に出席したことなどを記事にして掲載していた[9]。1923 年の関東大震災の際には、日本フレンズ奉仕団が結成され、ローズもメンバーの一人として救済活動に参加した[10]。関東大震災当時は、普連土女学園の副校長であったアリス・ピアソン (Alice Pearson) と共に軽井沢に滞在していたローズであったがが、東京に戻ることが賢明と判断し、帰京したことが記されていた。日本フレンズ奉仕団は、アメリカ・フレンズ奉仕団を通して資金や物資を調達し、被災者支援活動を展開していった。例えば、芝公園に罹災家族のために家を建て、衣類、牛乳の配布、児童の保護、医療活動、娯楽、修養の仕事などが挙げられる。これらの救済活動にはキリスト友会関係者、普連土学園の教職員や生徒も協力して活動した。

このことからもローズが教師だけではなく、フレンド派の宣教師として戦前にさまざまな活動に参加していたことがわかる。日米を行き来していたこともありローズは日本のフレンズにアメリカのフレンズの生活態度や信仰を伝える役割も担っていたと考えられる。また宣教師として矯風会の会議への参加や関東大震災時の日本フレンズ奉仕団としての救済活動から、ローズと日本のキリスト友会との繋がりを見ることができる。そして、関東大震災時の日本フレンド奉仕団としての経験は、戦時中のアメリカ・フレンズ奉仕団としての活動にもつながり、戦後、LARA のメンバーとして活動する際にも役立つ救済活動の経験となったと考えられる。

3. 戦中の活動 (1940–1946)

ローズのアメリカでの滞在は、ちょうど日系アメリカ人への強制立ち退き・収容の時期とかさなっている。そのような社会状況のなかで、ローズはフレンド派として、日系アメリカ人への支援活動に参加する。日系アメリカ人への支援活動を通して、ローズはまたアメリカの姿に対しても批判的に書簡を書いていた。

3.1. アメリカでの活動

ローズは 1940 年、すぐに日本に戻る予定で、休暇のためアメリカに帰国した。しかし、日米関係の悪化によりその帰国は 1946 年にアメリカ・フレンズ奉仕団の代表として帰国するまで約 6 年の日数が必要となった。1941 年 12 月 8 日、日本による真珠湾爆撃によって、アメリカ在住の日系アメリカ人の生活は一変した。一世は敵国外国人と見なされ、日本人の指導者は次々に検挙、逮捕された。そして 1942 年 2 月 19 日にルーズベルト大統領は行政命令 9066 にサインをした。このことにより必要に応じてアメリカ国内に軍事地域を指定し、その区域に共住するもので国防に危害を及ぼすと認められるものは、区別なく強制立ち退き

させる権限を陸軍省に与えるものであった。その結果、西武防衛司令部総司令官のジョン・L・デイビッド長官は3月2日に太平洋側の三つの州の西半分とアリゾナ州の南半分から日本人の血を引く者全員の立ち退きを命令した。しかし、3月19日までの一ヶ月以内に“自主的”に内陸部に転居した人々は、収容を免れることとなった[11)]。

3.2. アメリカ・フレンズ奉仕団の活動

このような苦境に立たされた日系人たち支援したのがアメリカ・フレンズ奉仕団であった。アメリカ・フレンズ奉仕団とは、第一次世界大戦中の1917年にフレンズ派によって作られた国際NGOであり、良心的兵役拒否に変わる仕事を提供することと、ヨーロッパの戦後復興に貢献することを目的として組織された[12)]。フレンズ派による日系アメリカ人への支援活動は、強制立ち退き・収容への抗議、ホステル施設の提供、収容所内の支援活動、大学の転学、労働者の転住、再定住への援助などが挙げられる[13)]。そのなかでも、AFSCが組織として活動したものに全米日系人学生転住協議会 (the National Japanese American Student Relocation Council = NJASRC) があり、むしろ、この働き以外でのAFSCの働きは必ずしも主要ではなかったとAFSCの総書記であったクラレンス・E・ピケット (Clarence Evan Pickett, 1884–1965) は述べている[14)]。それは当時の戦時転住局 (War Relocation Authority = WRA) の長官であった、ミルトン・S・アイゼンハワーが大学進学が困難となった学生たちの教育のために東部や中西部の大学への転入学をAFSCに要請した事業であったためである。そのため、収容所での支援などは、その州や地域、コミュニティーレベルでの組織の活動とされている[15)]。

このような背景のもと、フィラデルフィアのアメリカ・フレンズ奉仕団の総書記である、クラレンス・ピケットは日系アメリカ人が収容される前にローズとハーバート・ニコルソン (Herbert V. Nicholson) の日本宣教経験者を日系人アメリカ人奉仕担当者に任命した。島田法子によると、ローズとニコルソンは共に熱心なフレンド派の宣教師であり、戦前、長く日本で働いた経験から日本語が流暢で、しばしば収容所を訪問して日系人を励まし、トラックを運転しては、転居する日系人の家財の運搬を引き受けていた[16)]。このような活動はおそらくAFSCの組織としてではなく、その地域のフレンズ派の活動であったとも解釈できる。

1942年はローズがカリフォルニアのパサディナに滞在していた時期であり、母や姉妹などに出した書簡からも彼女がカリフォルニア中のさまざまな収容所を訪問していたことをみることができる。ローズの書いた書簡の中には、日系人のおかれた困難な状況、またそれに対するアメリカ人の反応なども垣間見ることができる。

例えば、1942年6月19日の書簡[17)]には、

> “The physical conditions within the camps are improving slowly, but al regimentation of human, beings is unhealthy. The barracks which were built for army dormitories are

gradually being transformed into little homes, but in most of the camps six or eight people must live in each room and that means, in many cases, two or three families have to share on room. […] The food is practically the same for small children, adolescents, working men, and the aged—a fact which causes much dissatisfaction."
(「キャンプ内での彼らの健康状態は徐々に改善されていますが、人間のすべてを統制することは不健全なことです。陸軍の宿舎として建てられたバラックは、徐々に小さな家に改変されていますが、ほとんどのキャンプで 6 人から 8 人の人々が一つの部屋に住まなければならず、それは多くの場合 2、3 の家族が一つの部屋共有していることになります。食料は基本的に小さな子供も、若者も、労働者も老人もみな同じものを食し、事実不満の原因となっています」)

またアメリカ人の態度に対しても、

"The notices in the newspapers are usually small notes on some inside page, and I am afraid that most of the people believe that the evacuation has been done "in the American way," and are quite willing to forget about the whole problem."
(「そしてもちろん、一般の人々は全く無関心である。新聞での記事は大抵小さな記事で、私はほとんどの人々は強制退去は"アメリカの方法"で行われたと信じ、すべての問題を忘れようとしているのではないかと思う」)

とも述べている。

このような書簡からローズが日系アメリカ人だけではなく、アメリカ人自身の態度にも問題視していることがわかる。日系アメリカ人に対する不満は真珠湾以前からのことであるが、アメリカ人のこのような態度はローズにとってどのように映ったのだろうか。

このように書かれている一方で、アメリカ・フレンズ奉仕団はアメリカ人が善意を示すパイプの一つでもあり、収容所の子供たちには教育用品やおもちゃが送られました。ローズもそのことについて

"It is still extremely difficult to visit the camps but a number of us have taken loads of books and other materials and have been cordially received in the administration offices; and in some cases have been able to visit about quite freely in the camps"
(「キャンプを訪問することは現在でも本当に困難ですが、管理局が受け取った心のこもった山ほどの本や他の物資を届ける時には、キャンプを訪問することが本当に自由に感じる」)

とも書いている。

このようにローズのアメリカでの活動は、日系アメリカ人との関わりが明らかになっている。日本での宣教活動の経験から日系アメリカ人の担当となったローズはカリフォルニアのさまざまな収容施設を訪問し、日系人の支援にあたり、日系人のおかれた状況を見ることとなった。またそれは日系人に対するアメリカ人の姿を見ることにもなった。このような救済、支援活動は戦前のローズの活動を継続しており、戦後の活動へと連続するものであったと考えられる。

ローズのアメリカでの活動は現在、博士論文執筆のために調査中であり、本稿ではローズが携わったと言われる二世の転学までは今回報告することができなかった。今後また機会があればご紹介させていただければと、考えている。

4. 戦後の活動 (1946–1970)

戦後はローズのそれまで活動が繋がり、最も活動的に過ごした時期なのではないだろうか。戦後、ローズはアメリカ・フレンズ奉仕団の日本支部代表、LARA (Licensed Agency for Relief in Asia) の駐日代表として 1946 年再び日本に来日し、LARA を代表とするさまざまな活動に携わることとなった。また、戦後のローズにとってキリスト友会の人々との関わりも欠かすことはできない。

4.1. LARA

戦後のローズの活動で代表的なものの一つに LARA の活動があげられる。LARA とは Licensed Agencies for Relief in Asia = アジア救済公認団体のことであり、頭文字をとった名称である。1946 年 4 月、第二次世界大戦により、困窮に陥ったアジアの国々の人々の救済事業を行うことを目的として全米のさまざまな宗教団体などを中心とする海外事業運営篤志団アメリカ協議会 (American Council if Voluntary Agencies for Foreign Service, Inc.) を親団体として結成された[18]。LARA は主に 13 から 14 の団体で構成され、当時日本への救済物資は LARA を通じてのみ可能であった。そのため LARA の救済物資には多くの日系アメリカ人からの支援が関わっていた。ローズは駐日代表の 3 人のうちの 1 人となり、カナダ人の教会世界奉仕団のジョージ・アーネスト・バットとカトリック戦時救済奉仕団の神父であるマイケル J. マキロップ（1917 年からは、ヘンリー・ジョセフ・フルセッカーに交代）と共に日本での物資の配給や、日本政府と GHQ また親団体との「調整役」として重要な役割を担った[19]。LARA の救済物資は 1946 年 11 月から 1952 年までの約 6 年間行われ、量としては約 1 万 6,700 トン以上、額としては 400 億円以上であった[20]。これらの物資は主に乳児院や児童施設、病院や養老院など自力で生活物資を手に入れることの困難な施設から順番に配給された。また戦争による被害の大きな都道府県、地域から優先に配れていき東京や大阪、広島、長崎が優先された。

1947年代のローズの書簡を見ると広島や大阪からの書簡を見ることができ、彼女が実際にその地域に足を運び、現地の状況を見ていたことがわかる[21]。例えば、1947年7月14日に送った書簡[22]には関西地方（京都、大阪、神戸）のさまざまな施設での調査が報告されていた。ここでの調査はGHQのソーシャルワーカーとともに行動しており、同志社や京都の幼児施設、救済施設などを訪問し、書簡には有意義な時間を過ごすことができたと書かれていた。また孤児院や視覚障害のための施設も訪問していた。この視覚障害者の施設は、クエーカーの岩橋武夫の作った施設であり、ローズはここの施設を見学して、

> "There is much real light in their home and I am sure it spreads to all those they come in contact with."
> （「彼らの家には多くの光があり、それらが彼らが関わったものに広がっていくことでしょう」）

他にも寺や一灯園などが運営するキリスト教ではない乳児院にもローズは立ち寄っていた。このことは、主にキリスト教系団体によって構成されたLARAの支援活動が、宗教の壁を越えて、必要とする人々に対して平等に行われていたことを見ることができる。またローズは混血の子供を妊娠している母親たちの施設も見学している。そのことについてローズは、

> "I learned that they are getting ready to accept some of the mothers excepting Eurasian babies. Our soldiers are leaving quite a trail of such. Again I was impressed with the effect of radiant personalities on their surroundings."
> （「私は彼らがユーラシアンベイビー（＝アジア人と欧米系白人の混血児）の母親の一部を受け入れる準備ができていることを学びました。私たちの兵士はそのようなかなりの痕跡を残していきました。私は彼らの周囲のそのような輝くような人格に感銘をうけました。」）

また1947年10月29日のジョージ・バットに送った書簡[23]には、カリフォルニアの養護施設や保育所で集められたおもちゃがあり、これはクリスマスに向けて配布する予定であると書かれ心も満たされることが今の子供たちに必要であり、その方法として、クリスマスプレゼントを贈ることが適切だと考えられていたようだ。このことは自らの足で被害地域を訪問し、実際に何が起こり、何を必要としているのかを目の当たりにしたローズであったからこそ、考えられる行動だったのではないだろうか。

このようなローズの姿を見ると、LARAを通して日本人、アメリカ人、クリスチャン、仏教徒などさまざまな境界線を越えて、人間としての正しさ、良心のあり方をローズは言葉

だけではなく、行動を通して表していった。また日本の状況をアメリカのフレンズに伝え、必要な救済物資を的確に集め、人々に配布することができたのではないだろうか。またLARAの活動は関東大震災や日系アメリカ人への支援活動とも連続するものだと考えられる。戦後、ローズが日本で円滑に活動できた理由の一つに、人との繋がり、特にキリスト友会の人々との繋がりの存在が挙げられる。彼らとの戦前からのネットワークが、戦後のローズの活動を円滑に進めることが可能になった要因の一つだと考えられる。

4.2. キリスト友会の人々との繋がり

ローズは来日した1947年から日本を去る1960年までの約13年間にLARAの駐日代表や普連土学園の教師、学長、津田塾大学の教師や国際基督教大学の理事会や評議会のメンバー、また皇太子明仁親王及び天皇家の英語教師などをつとめることとなる。このようなさまざまな仕事に携わる背景には、戦前からの日本人との繋がりが一要因となっていることも考えられる。

1947年1月3日の書簡には元旦での過ごし方について書かれており、フレンドセンターで朝食をとった後、日本人の2人と浅草に行ったことが書かれていた。また別の書簡には、軽井沢でのリトリートのことについて触れてられていた。このリトリートに一緒に行ったメンバーには、エリザベス・ヴァイニング、キリスト友会の鞍馬菊枝、普連土学園学長の石田トシ、浦口眞左や島崎折江、鮎澤巌らの存在が挙げられている。このリトリートは旅行のようなもので、メディテーションを行うことが目的となっていた。エリザベス・ヴァイニングは戦後、天皇家の家庭教師となった人物として有名であり、1950年からはヴァイニングに代わってローズが英語教師となった。鮎澤巌との書簡のやりとりは戦前から行われており、他にも恵泉女学園の創設者である河合道との書簡のやりとりも確認できる。鮎澤巌は後に国際基督教大学創設時から労働問題や国際情勢の授業を担当した人物である。河合道も戦後、教育刷新審議会委員などの要職につき、日本の教育改革のための中心的人物の一人であった。

他にもローズの追悼記念集である『一クエーカーの足跡』を見てみると、上田辰之助、前田多門、高木八尺、神谷美恵子や高橋たねといった、教育やキリスト教関係の人々との繋がりもみることができる。もちろん、このような人々だけではなく、戦前からのキリスト友会の人々や普連土学園の人々との繋がりも欠かすことはできない。

このようにローズは戦後、さまざまな日本人との繋がりの中で、LARAの救済活動を行った。戦前からの日本での活動の経験から、日本人とのネットワークがあったことは、戦後のローズにとっても、またキリスト友会の人々にとっても互いに有益なことだったと考えられる。

5. おわりに

以上のように本研究では、エスター B. ローズの活動を戦前、戦中、戦後を通して検討してきた。戦前のローズは、宣教師として、また普連土女学校の教師として日本人と関わり、関東大震災の時には日本フレンズ奉仕団のメンバーとして救済活動に参加した。また日米間を行き来し、アメリカのフレンズの活動や思想を、日本のフレンズに伝える役割を果たしていった。戦時中には日本での経験をかわれ、収容された日系アメリカ人の奉仕担当となる。日本での生活経験や日本語も話せたローズの存在は、日系アメリカ人の奉仕担当として最適な存在であった。支援活動を通して、ローズは日系アメリア人の置かれた状況、またそれに対するアメリカの態度に対して批判的に書簡に記していた。そして、戦後、LARA の駐日代表として再来日したローズは、アメリカでの日系アメリカ人救援活動の経験と日本との繋がりがあり、戦後の教育改革を含むさまざまかアメリカとの関係のなかで、日本人にとってもアメリカ人にとっても極めて重要な役割を担っていたと考えられる。またキリスト友会の人々との繋がりも多様な働きを可能にした理由だと考えられる。戦前からの日本との繋がりや幅広い人間関係が、戦後、ICU の理事を含む日本でのさまざまな仕事にローズを繋げたと考えられる。

このような戦前から戦後にかけて日米間を行き来し、両国で活動したエスター・B・ローズに関する研究は、今後、博士論文においてよりさまざまな一次史料を利用し、研究を進める予定である。

註

1) エスター B. ローズの生涯に関しては、エスター B. ローズ記念出版委員会による『一クエーカーの足跡』エスター B. ローズ記念出版委員会、1980 年を参照。
2) フレンド派（クエーカー）に関しては、普連土学園百年史編纂委員会編『普連土学園百年史』普連土学園、1987 年、16–17 頁を参考にしている。
3) 戸田徹子「フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会の誕生」『山梨県立女子短大紀要』第 33 号、2000 年を参照。
4) 普連土学園百年史編纂委員会『普連土学園百年史』普連土学園、1987 年、5 頁。
5) 同上、158–160 頁。
6) 同上、158–160 頁。
7) 同上、158–160 頁。
8) エスター B. ローズ記念出版委員会、前掲、104 頁。
9) 「米国の友会」（『愛の友』1915 年 12 月 5 日発行、第 89 号）、「戦時の米国友会徒」（同、1917 年 10 月 5 日発行、第 94 号）、「「個人消息」（同、1918 年 4 月 5 日発行、第 98 号）
10) 普連土学園百年史編纂委員会編、前掲、52–53 頁。
11) 島田法子『日系アメリカ人の太平洋戦争』リーベル出版、1995 年、12 頁。
12) 戸田徹子「米国フレンズ奉仕団と日本（1）」『山梨国際研究：山梨県立大学国際政策学部紀要』第 5 号、山梨県立大学、2010 年、73 頁。

13)　同上、79 頁。

14)　同上、79 頁。

15)　同上、79–80 頁。

16)　島田法子　前掲、108–109 頁。

17)　Letters June 19, 1942

18)　奥須磨子「ララ物資のはなし　敗戦直後日本人への救援」『東西南北』和光大学総合文化研究所、2007 年、176 頁。

19)　多々良紀夫『救援物資は太平洋をこえて』社会福祉広報協会、1999 年、24–32 頁。

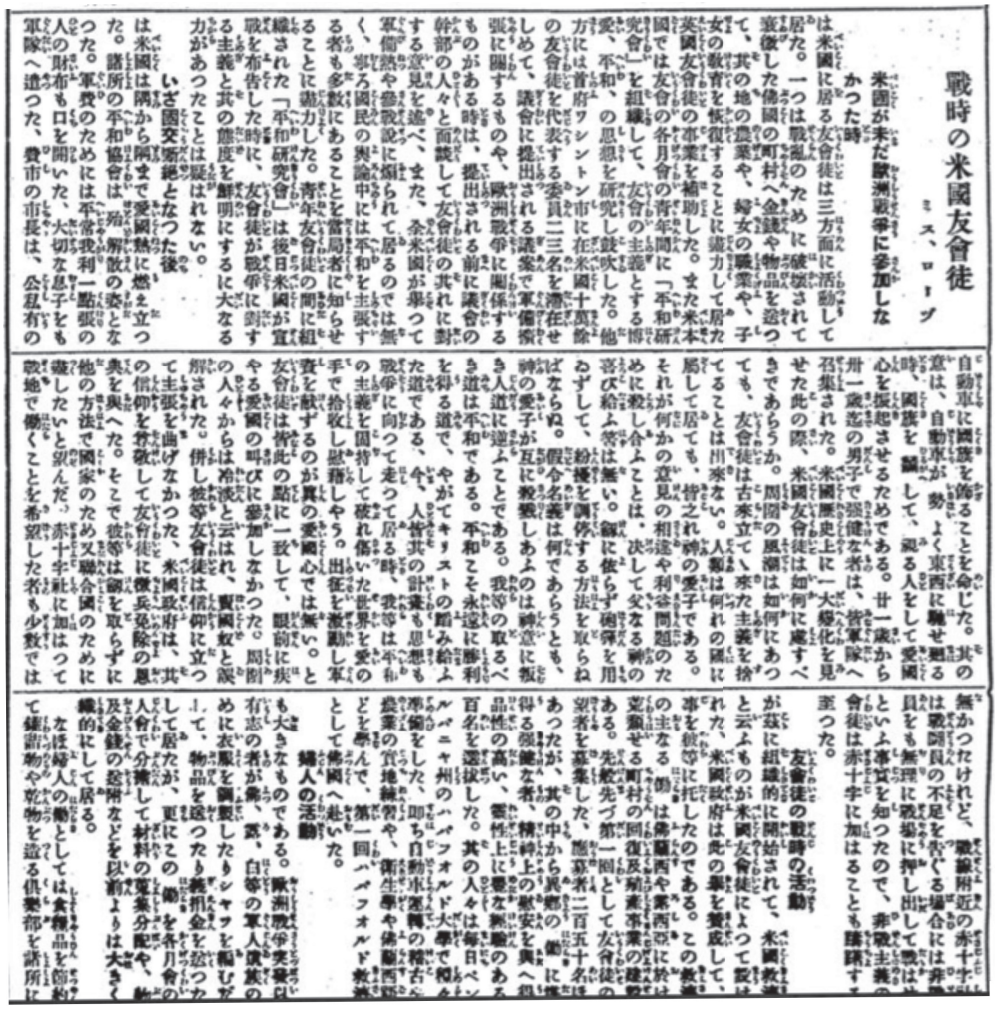
20)　同上、76–77 頁。

21)　LARA による救援活動は 1946 年の 11 月末から行われているが、ローズの書簡の中には 1946 年代の書簡が多くはなかったため、1947 年の書簡を中心に検討している。

22)　Letters, July 14th, 1947.

23)　Letters, October 19th, 1947.

1937 年普連土学園 50 周年時『普連土学園百年史』



戰時の米國友會徒

ミス、ロージ

米國が未だ歐洲戰爭に參加しなかつた時

は米國に居る友會徒は三方面に活動して居た。一つは戰亂のために破壊されて衰微した佛國の町村へ金錢や物品を送つて、其の地の農業や、婦女の職業や、子女の教育を恢復することに盡力して居た。英國友會徒の事業を補助した。また米本國では友會の各月會の青年間に「平和研究會」を組織して、友會の主義とする博愛、平和の思想を研究し鼓吹した。他方には首府ワシントン市に在米國十萬餘の友會徒を代表する委員二三名を滯在せしめて、議會に提出される議案で軍備擴張に關係するものや、歐洲戰爭に關係するものがある時は、提出される前に議會の幹部の人々と面談して友會徒の其れに對する意見を述べ、また、米國が巻つて軍備熱や參戰說に煽られて居るのでは無く、寧ろ國民の輿論中には平和を主張する者も多數にあることを當局者に知らせることに盡力した。青年友會徒の間に組織された「平和研究會」は後日米國が宣戰を布告した時に、友會徒が戰爭に對する主義と其の態度を鮮明にするに大なる力があつたことは疑はれない。

いざ國交斷絶となつた後は米國は隣から隣まで愛國熱に燃え立つた。諸所の平和協會は殆ん解散の姿となつた。軍費のためには平常我利一點張の人の財布も口を開いた、大切な息子をも軍隊へ遣つた、費市の市長は、公私有の自動車に國旗を飾ることを命じた。其の意は、自動車が勢よく東西に馳せ廻る時、國旗を翻して、親る人をして愛國心を振起させるためである。廿一歳から召集された。米國歴史上に一大變化を見せた此の際、米國友會徒は如何に處すべきであらうか。周圍の風潮は如何にあつても、友會徒は古來立てゝ來た主義を捨てることは出來ない。人類は何れの國に居しても、皆之れ神の愛子である。それが何かの意見の相違や利害問題のために殺し合ふことは、決して父なる神の喜び給ふ筋は無い。飽に依らず砲彈を用ひずして、給養を調停する方法を取らぬ者は神の愛子が互に殺戮しあふのは神意に叛くことである。我等の取るべき道は平和である。平和こそ永遠に勝利を得る道で、やがてキリストの贖ひ給ふた道である。今、人皆其の計畫も思想も戰爭に向つて走つて居る時、我等は和平の主義と固持して破れ傷いた世界を愛の手で拾收し慰藉しやう。出征者を激勵し軍資を献ずるのが其の愛國心では無い。友會徒は皆此の點に一致して、眼前に疾やる愛國の叫びに參加しなかつた。周圍の人々からは冷淡と云はれ、賣國奴と誤解された。併し彼等友會徒は信仰に立つて主張を曲げなかつた、米國政府は、其の信仰を尊敬して友會徒に徴兵免除の恩典を與へた。そこで彼等は國を取らずに他の方法で國家のため又聯合國のために尽したいと望んだ。赤十字社に加はつて傷兵救護で働くことを希望した者も少數では無かつたけれど、職業附近の赤十字社は戰闘員の不足を喜ぐる場合には非戰闘員の不足を無理に戰場に押し出して戰士主義の犠牲にしたりしたことは、といふ事實を知つたので、非戰主義の會徒は赤十字に加はることも躊躇すつた。

友會徒の戰時の活動が茲に組織的に開始されて、米國教育界に於ては、米國政府は此の事を賛成して、事を彼等に托したのである。この教育の主なる節は佛蘭西や墨西哥に於ては、復及殖産業の建設に、支那の回教徒の移住に、墨西哥の移民の救濟に、ルーマニヤ州のハバフォルド大學で教育をした、即ち自動車運轉や、電氣の實地練習や、園生學や佛蘭西語の教授の實地練習や、第一回ハバフォルド教授を學んで、第一回ハバフォルドとして佛國へ赴いた。

歸人の活動

も大きなものである。歐洲戰爭災後は有志の者が、衣、寒、白等の軍人救護のために衣服を調製したりシャツを編むガして、物品を送つたり義捐金を送つたして居たが、更にこの節を各月會の人會で分擔して材料の寒業分配や、動及金錢の寄附などを以前よりは大きく組織的にして居る。

なほ婦人の働としては食糧品を節約して健康物や乾物を送る倶樂部を諸所に

「戦時の米国友会徒」『愛の友』（1917 年 10 月 5 日発行、第 94 号）

American Friends Service Committee

Pacific Coast Branch

544 E. Orange Grove Ave.

Pasadena California

June 19, 1942

Dear Friends:

The weeks have slipped by since I wrote last, and each day has been so full of interesting experiences it is hard to be brief but I shall try.

Fifty of the residents of Forsythe Hostel were among the last to be evacuated from Los Angeles. They had heard from so many of their friends about conditions in camp that they knew pretty well what to take and what not to take. Then, too, they had been gradually packing and getting ready for several weeks before, so that the last days were quite serene in comparison with the hectic days of opening, or of sending off the group which went to Manzanar early in April. A number of us helped with the cooking the last few days, and the fellowship with this group with whom we had worked for three months was very lovely. They certainly are appreciative and we felt they have gained much by the experience. They know there are Caucasians outside the camps who really care. That knowledge will help them through the weeks and months of dreary camp life when they are so cut off from the rest of American life. They have had some experience in group living, and though, of course, in the camps they will be terribly regimented, the community cooking and cleaning in which they have taken part so whole-heartedly will be excellent preparation for the duties assigned to them in camp.

The physical conditions within the camps are improving slowly, but all regimentation of human beings is unhealthy. The barracks which were built for army dormitories are gradually being transformed into little homes, but in most of the camps six or eight people must live in each room and that means, in many cases, two or three families have to share one room. The toilets and washrooms which were entirely without partitions are gradually being changed to suit the needs of mixed age groups. The food is practically the same for small children, adolescents, working men, and the aged -- a fact which causes much dissatisfaction.

There still seems to be no very well thought out plan of resettlement. The government keeps working on ways of getting groups out into certain projects, but the whole setup sounds very much like labor battalions, and though it will be better for the able-bodied men to have some work to do, the plan seems so horribly undemocratic that we are deeply concerned.

Letters from Esther B. Rhoads, June 19, 1942 ①

-2-

We are all much interested in the work which President Barstow is heading up in relation to the resettlement of students in colleges. If that works out, it should not only help the students who have the privilege of continuing with their college work, but also give courage to the groups within the camps.

We had so hoped that the people in the free area of eastern California who had resettled on their own would succeed, but this area, too, is to be evacuated. I have made three trips there visiting families we know. The last time I stayed a week and was accompanied by some work-campers. Just where the pressure for extending the evacuation comes from none of us know -- and of course, the general public is entirely apathetic. The notices in the newspapers are usually small notes on some inside page, and I am afraid that most of the people believe that the evacuation has been done "in the American way," and are quite willing to forget about the whole problem. We do hope that the groups across the mountains who have settled in Utah, Colorado, and other states may be allowed to make good.

We are glad to know that Eleanor Clarke is encouraging the collection of recreational and educational materials for the young people within the camps. They have practically nothing. We understand that at Santa Anita, 1400 primary school children have been organized into voluntary groups, and 1100 high school students are trying to go on with their studies, even though they have practically no books or other equipment. Japanese care so much for education it is a terrible disappointment for them to feel that their children are getting behind. Some of the schools have made arrangements for special examinations and are giving credit to students about to graduate, but in many cases the spring term has been practically lost and there is very little assurance that the assembly centers will have schools. The reception centers, such as Owens Valley and Parker Dam, are, I believe, to have regular school courses beginning next September.

It is still extremely difficult to visit the camps but a number of us have taken loads of books and other materials and have been cordially received in the administration offices; and in some cases have been able to visit about quite freely in the camps. At certain camps it is necessary to write ahead and make arrangements, even though we can talk to our friends through a fence only. Actually, we have found it easier to see the men detained by the F.B.I. at Tujunga than to see our friends at Santa Anita Assembly Center. Such is the result of government red tape!

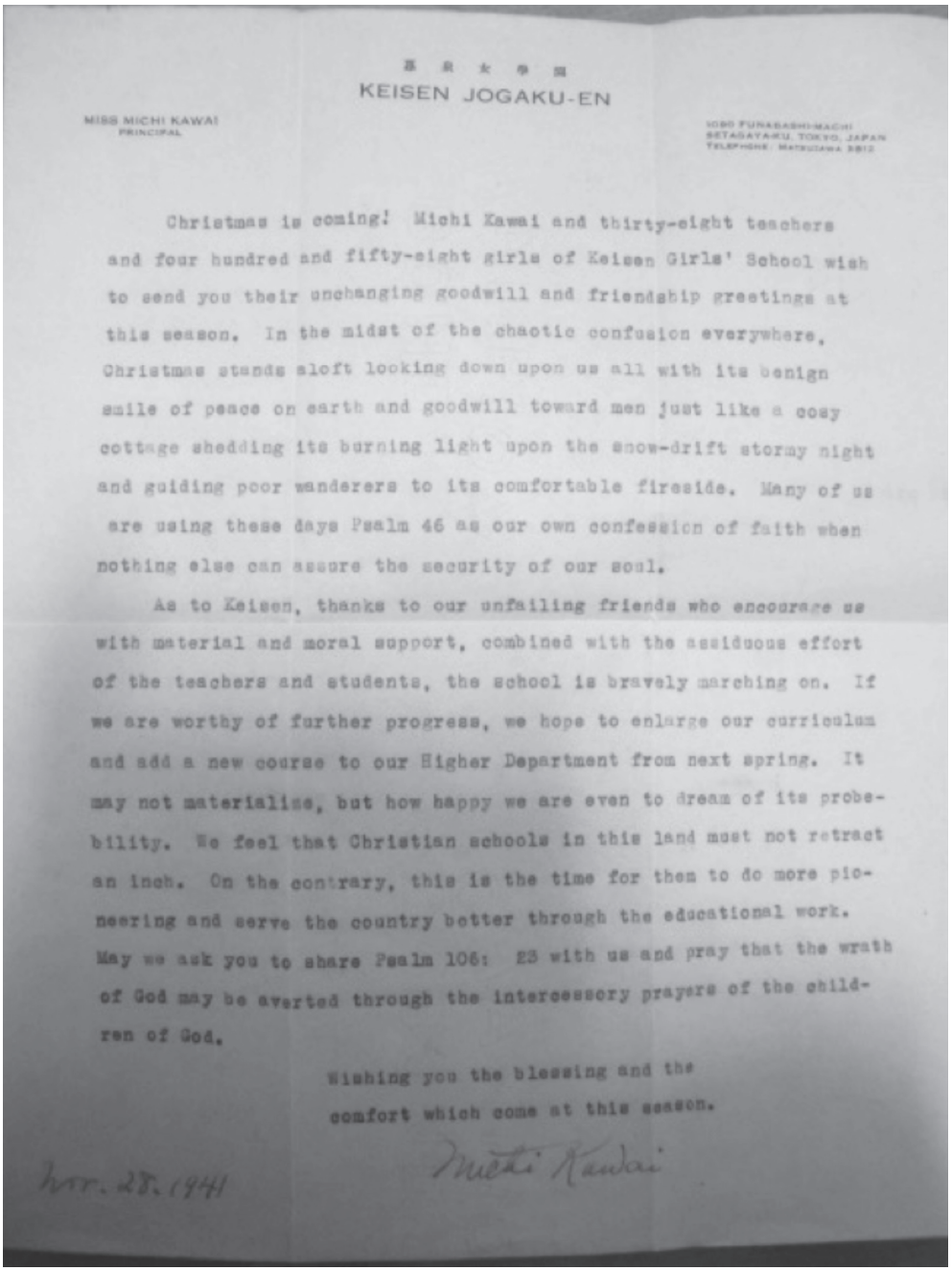
It is good to think of the first load of Japanese setting sail from New York in order to be exchanged with some of our American citizens. I wonder how long it will take and who will come back from Japan to us.

Sincerely,

Esther B. Rhoads

Esther B. Rhoads

Letters from Esther B. Rhoads, June 19, 1942 ②



恵泉女学園

KEISEN JOGAKU-EN

MISS MICHI KAWAI
PRINCIPAL

1080 FUNABASHI-MACHI
SETAGAYA-KU, TOKYO, JAPAN
TELEPHONE: MATSUGAWA 3813

Christmas is coming! Michi Kawai and thirty-eight teachers and four hundred and fifty-eight girls of Keisen Girls' School wish to send you their unchanging goodwill and friendship greetings at this season. In the midst of the chaotic confusion everywhere, Christmas stands aloft looking down upon us all with its benign smile of peace on earth and goodwill toward men just like a cosy cottage shedding its burning light upon the snow-drift stormy night and guiding poor wanderers to its comfortable fireside. Many of us are using these days Psalm 46 as our own confession of faith when nothing else can assure the security of our soul.

As to Keisen, thanks to our unfailing friends who encourage us with material and moral support, combined with the assiduous effort of the teachers and students, the school is bravely marching on. If we are worthy of further progress, we hope to enlarge our curriculum and add a new course to our Higher Department from next spring. It may not materialise, but how happy we are even to dream of its probability. We feel that Christian schools in this land must not retract an inch. On the contrary, this is the time for them to do more pioneering and serve the country better through the educational work. May we ask you to share Psalm 106: 23 with us and pray that the wrath of God may be averted through the intercessory prayers of the children of God.

Wishing you the blessing and the comfort which come at this season.

Michi Kawai

Nov. 28. 1941

河合道からローズへの書簡。「恵泉にとっては、私たちを物質的にも精神的にも支えてくれる信頼する友人と根気強く努力を続ける教師や生徒が結びついて、恵泉は勇気を持って前に歩み続ける。（中略）この国にあるキリスト教の学校は一歩たりとも逃げ出してはらなないと感じています。それどころか今が彼らにとってより一層の教育活動をとおして、この国を開拓し、救う時なのです。」1941 年 11 月 28 日

-3-

children in Osaka now, 30 out on a farm together and 60 older ones placed in the country in homes, farms, etc. Such a contrast, the children's faces were bright, all looked in good condition except the most recent arrivals. Besides the ration from the city, she gets gifts from church people & country people and Episcopal & other G.I. remember her work when they get packages from home. It just shows what can be done with energetic faith and determination.

In Kobe I did our survey alone as Father McKillop wanted to visit Catholic Institutions & some of his friends. He worked in Kyoto 7 years. It was the same process of contacting the Head of M. G. then M. G. Welfare & finally Japanese Welfare. I spent most of the afternoon visiting institutions. They wanted to take me to Hoppo a reformatory near the place where Irene Smith had her orphanage. This would have taken all afternoon so I suggested seeing three nearer places. Fortunately the man in charge of Hoppo was in Kobe and acted as one of my guides so I learned a great deal about his institution which is run on the cottage plan. The little boys who hang around stations etc. get picked up every few days by Welfare or Police. Most of them accept the bath, clean clothes and meal given them but get away in a day or so as they don't get enough to eat and it is more fun pretending to shine shoes - begging etc. Some of these little rascals are awfully cute. I saw one about half Jack's size, but probably 7 - dirty as could be trying to get a nap on a station platform lying with his hands over his ears to deaden the sound of passing feet. Some of these children eventually reach Mr. Watanabe's refors school.

The first place I saw was an orphanage which had been run by Christians for three generations. Fire had destroyed all but the walls of the newest building - concrete. There in the midst of ruins a very wonderful little woman was starting again with about 30 children. Conditions are bad but the spirit is wonderful. Clothes - she listed as her greatest need but food is also very short.

The other two places I visited had not been burned. One was a hostel for mothers with children - lately widows & wives of soldiers who are still overseas have most of the space. Each family gets a cash allowance & with the help of contributions from relatives somehow makes out. The place lacked warmth in spirit, had no yard - rather dark but meets a need. About 15 small families are accomodated. Next was a larger institution called New Life Garden - actually it is a kind of refuge for those who are down & out. They accomodate 250 & have pretty good equipment. In the Men's dormitory I was struck with a number of young men - probably soldiers returned to find homes burned and no trace of families. Like in all such institutions they are short of food and clothing.

This is only a sample of the need in institutions.

Saturday I spent from about 8:30 to 11:30 getting out to see Mr. Iwahashi the blind Friend. Travel by public is exhausting and the heat awful. The Iwahashi's seem in good shape though thinner. The boy is in normal school and the girl almost through high school. Both are eager to study abroad. There is practically nothing being done to educate the blind and the war has added 10,000 blind soldiers to the problem. They need paper to print Braille books - clothing and food for those who should be in the Light House (training school) etc. At present they are getting tin cans from the U.S.Army Hospital mess and giving work to the wives of blind men. There is much real light in their home and I am sure it spreads to all those they come in contact with. They appreciated very much the visits of Bob Walker and Gordon Bowles.

Next I tried to get in touch with a former Friends School teacher but found I would have to walk 4 or 5 miles in the hot sun and by so doing I would have

Letters from Esther B. Rhoads, July 14th, 1947